関係的性質の媒介としての物語——Paul Roth の物語的説明論の批判的検討*

苗村弘太郎

概要

In recent years, narrative explanation has been a focus of attention within philosophy of science. Roth (2020) makes some important contributions to this topic, but his argument has some problems. This paper examines and modifies his claim. Roth claims that narrative explanation is a distinctive kind of explanation. This claim is based on two theses: nonstandardization thesis and nondetachability thesis. These theses make intelligible an important feature of narratives; that is, descriptions of events in narratives are dependent on narratives as a whole which show a beginning-middle-end structure. However, these theses have some serious problems. This paper modifies these theses and suggests a better way to understand the important features of narratives.

Keywords: 物語、歴史叙述、物語的説明、科学的説明、歴史学の哲学

1 序論

近年、歴史の分析哲学が再興の動きを見せている。分析哲学および科学哲学において歴史が主要な議論対象となっていたのは、1950 年代から 60 年代にかけてのことである。そこで問題になっていたのは、科学的説明に関する議論の古典として知られる Hempel の被覆法則モデル（covering-law model）と歴史学の関係であった。論理経験主義の統一科学の理念を背景として、説明の形式は歴史学においても自然科学と同一であると主張する Hempel（[1942] 1965a）の議論をめぐって盛んに議論がなされた。1970 年代以降、この論点は決着を見ないまま放置されていたが、近年、手つかずになっていた論点を整理し直し、議論を再開する機運が高まっている。

* *CAP* Vol. 13 (2021) pp. 124-140. 受理日: 2021.7.28 採用日: 2021.11.9 採用カテゴリ: 原著論文 掲載日: 2021.11.18.

この潮流において中心的な問題となっているのが、歴史叙述（historical narrative）、および、物語的説明（narrative explanation）の特性である[*1]。この論点は歴史学における説明をめぐる 1960 年代の論争において Hempel 派に対する批判として提出された。Hempel によれば、歴史学も自然科学と同様に説明に関心を持っており、説明の内実は両者において本質的には異なってはいない。したがって、Hempel の被覆法則モデルは自然科学における説明に対してだけではなく、歴史学における説明に対しても妥当する。このような議論に対して、Hempel の批判者の一部は、歴史学が説明に関心を持つことを認めつつも、歴史学は過去の特定の出来事を物語るという特徴を持ち、それゆえに被覆法則説明とは異なる独自の形式によって説明を行うと主張した。その独自の説明形式が物語的説明である（Danto 1965; Gallie 1964; White 1966）。この論点は近年再び注目を集めつつあり、その影響は地質学や古生物学などの歴史科学、また、質的な社会科学を対象にした哲学にも及んでいる（e.g. Beatty 2017; Currie 2019; Ereshefsky and Turner 2019; Morgan 2017）。

本稿はこのような議論の中でも Roth（2020）による議論をとりあげたい。近年の物語的説明論の中でも、Roth（2020）は物語の特性について独創的かつ重要な指摘を行っており、今後の議論への重要な貢献となりうる。しかし、彼の議論は問題のある主張を含んでおり、結果、彼の指摘の重要性が見えにくくなっている。本稿の目的は、彼の議論を再構成し、彼が適切な指摘を行っている部分と問題のある主張を行っている部分を明確に区別し、適切な指摘をうまく救う議論を提案することである。

本稿の目的について一つ断りを入れておきたい。本稿の目的は物語的説明という独自の説明形式を擁護することではない。物語的説明という説明形式を擁護する議論によれば、物語的説明は典型的な科学的説明とは異なるが、それでも科学的説明の一類型とみなされるべきものである。そのような主張を擁護するには、過去を物語るという行為が従来の科学的説明のモデルには回収されない特徴を持つことを示し、加えて、その特徴が過去の出来事に対する説明を与えると論じる必要がある。事実、Roth も同様に議論を進めているが、本稿は物語が過去の出来事に対して説明を与えるのかという論点までは踏み込まない。本稿の目的は、Roth による物語の特徴づけを洗練させることで、過去を物語るという行為が従来の科学的説明のモデルでは捉えきれない特徴を持つと論じるに留まる。物語るという行為を説明とみなすことができるのかという問題は、本稿の議論を踏まえた上で論じるべき課題として残る。

しかしながら、それでも本稿の意義は小さくない。まず、本稿の議論は物語、および、歴史叙述の特徴を明確化するため、なぜ物語が説明としての資格を持つのかという点を論じるにあたっての争点をより明確にする。また、歴史を叙述するという行為が広く行われていることに鑑みれば、歴史叙述について哲学的に反省すること自体に意義があるだろう。とりわけ、分析哲学や科学哲学においては分野の歴史に関する研究が盛んになっており、歴史を叙述することに関する哲学的反省は重要性を増している。そのような哲学的反省の土台は整っているとは言えないが、本稿は歴史叙述の特徴を論じることでその土台作りに貢献できる。

[*1] 本稿では narrative という語に対して、単体の場合は「物語」、historical narrative の場合には「叙述」という訳語をあてている。訳語を統一しなかった理由は、一方で、この語には物語という訳語があてられてきた経緯があるが（cf. 鹿島 2006）、他方で、後者の場合に「物語」を当てるのは不自然になるためである。

本論に入る前に物語という語に関わる用語法を整理しておきたい。物語という語は様々な領域で様々な意味で用いられてきたため、そのまま議論を進めると混乱を招く恐れがあるからだ。鹿島（2006）が指摘するように物語（narrative）という語は歴史を物語る行為とその所産という複数の意味を持つ。また、ほとんど同様の意味で歴史叙述（historical narrative）という語も用いられる。本稿では、鹿島（2006）の用語法を部分的に踏まえ、出来事をとりまとめて語る行為を指して「物語り」あるいは「語り」、その行為の産物であるテクストに対して「物語」ないし「歴史叙述」という語を用いることにする。この用語法において、物語るという行為はそれ自体としては過去を構成しているわけではなく、あくまで出来事をとりまとめて記述しているにすぎない。ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』（White 1973）に代表されるように、物語という語は歴史と文学の類似性を論じるためにも用いられるが、Roth（2020: 7, 67）は White を名指しながら、彼のように物語という語に文学的なテクストという意味を込めることはしないと述べている。したがって、物語という語はその内容がフィクションであるという含意を持たないので注意が必要である。なお、この用語法は歴史叙述という特殊な営みを念頭に置いたものであり、他の領域における物語の概念とは導入の文脈が大きく異なることに注意されたい[*2]。

本稿は以下のような構成で議論を進める。まず、2 節において、物語の特徴づけがなぜ問題になるのか、および、Roth が物語をどのように特徴づけるのかを概観した上で、Roth の議論の一部に重大な問題が存在することを指摘する。それを踏まえ、3 節において、Roth の議論の重要な部分をうまく救うことができる代替の立場を提案する。

2 Paul Roth の物語論の導入

2.1 なぜ「物語」が問題になるのか

Roth による物語の特徴づけを紹介する前に、物語という概念によって何が念頭に置かれているのか、および、なぜ物語の特徴づけが問題になるのかを明らかにしておく。まず、歴史叙述に関する議論において物語という概念が導入される時、そこで念頭に置かれているのは、歴史叙述はただ事実を羅列した年表（chronicle）とは異なるということである。このことは、Danto が導入した理想的年代記（ideal chronicle）の思考実験を踏まえると分かりやすいだろう（Danto 1965: 143–181, 訳: 186–219）。理想的年代記とは、Danto によれば、歴史上のあらゆる時点・場所において起こったことを瞬時にくまなく記録している年表である。この年代記は歴史叙述としての資格を備えていると言えるだろうか。Danto によれば答えは否である。なぜならば、この年代記は異なる時点の出来事を結び付ける記述を持たないからである。例えば、歴史家は、地球ではなく太陽が宇宙の中心にあるという宇宙観をアリスタルコスが紀元前 2 世紀に提唱していた事実と、16 世紀にコペルニクスが天動説に対抗して地動説を提唱したという事実を関連づけ、「アリスタルコスはコペルニクスの地動説を先取りしていた」という記述を歴史叙述の中に盛り込むことができる。だ

[*2] 現代哲学一般における物語の概念については高田（2017）を参照。

が、このような記述は理想的年代記には含まれていない。なぜなら、紀元前 2 世紀の時点で起こったことをどれだけ詳細に記述したところで、コペルニクスの著作との関連を記述することは不可能だからである。このように、異なる時点の出来事を関連づけて記述する文を Danto は物語文（narrative sentence）と命名する。各々の時点で起こったことを正しく年表に記録することと、物語文によって歴史を物語ることをDantoは区別し、歴史を物語ること、すなわち歴史叙述は歴史学者の重要な仕事の一つだと論じた。

それでは、歴史を物語るとはいったい何をすることなのであろうか。言い換えれば、過去の出来事を関連づけて物語を語るとは、具体的には何をすることなのだろうか。この問題にどう答えるかということが歴史叙述に関する議論の焦点となってきた。Roth（2020: 11–13）によれば、この問題に対して、近年の議論のほとんどは、物語を語ることは出来事を因果関係によって結び付けることであるという立場をとっている（e.g. Velleman 2003; Suteber 2015）。この立場によれば、年表と物語の相違点は、年表が出来事をただ列挙するのに対し、物語は出来事を因果関係で結び付けているという点にすぎない。つまり、歴史を物語るということは結局のところ通常の因果的説明に他ならない。因果的説明は科学的説明の典型として広く受け入れられているため、歴史を物語ることが通常の因果的説明の域を出ないのであれば、物語については科学的説明に関する議論で十分に扱うことができ、それ以上に論じることは残らないことになる。

それに対して、歴史を物語ることには固有の論じるべき問題があると Roth は考える。Roth によれば、近年の議論は物語を語るということをあまりに単純に捉えてしまっているために、物語に固有の特徴を見落としている。Roth の見立てによれば、かつて物語について論じた Danto（1965）や Mink（1987a）はこのような立場を批判し、物語を語ることが通常の因果的説明には尽きないということを指摘していたのだが、近年の議論は彼らの指摘を適切に理解できていないため、物語の重要性を見誤っている。

このような問題意識から、Roth は Danto や Mink の議論を参照しながら、通常の因果的説明とは区別されるものとして物語を特徴づけようとする。その際に Roth が念頭に置いているのは Hempel の被覆法則モデルである。Roth は Hempel 以降の科学的説明論争の進展については明示的に触れていないが、Roth の議論は現在の議論状況に照らしても有効である。Hempel 以来、因果的説明には法則か法則に準ずる一般則（generalization）が必要だという主張は広く受け容れられているが[*3]、Roth の主張によれば、物語はそのような法則や一般則に基づく説明として書きなおすことができないからだ。この主張が正しければ、物語は通常の因果的説明には回収できないものであり、したがって物語はそれ自体として議論の対象になることになる。次項では、この主張を擁護するために、Roth がどのように物語を規定しているのかを概観したい。

2.2 物語と二つのテーゼ

まず、物語の基本的な規定を整理したい。Roth の議論は少々複雑なので、以下では彼の議論を再構

[*3] Hempel 以降の科学的説明論争においては、科学的説明はいかなる形式をとるのか、また、科学的説明には何が必要なのかといった論点について、いくつもの学説が提示され、しのぎを削っている。とはいえ、説明には法則に準ずる一般則が必要だという点に関してはどの学説も一致している。そうした議論状況の概観としては清水・小林（2021）を参照。

成し、本稿の議論に必要な部分のみを提示する。まず確認しておきたいのは、物語とは過去の一連の出来事それ自体ではなく、その記述であるということである。Roth（2020: 6）が Little（2010: 28）を引用しながら述べるところによると、「それ［物語］は一連の出来事の展開の陳述（account）」である。例えば、第一次大戦が起こった経緯に関する研究書があるとき、物語とはその経緯の記述であって、研究書が明らかにしている開戦の経緯それ自体ではない。この後の議論では物語と出来事の関係が問題になるので、混乱を防ぐため、物語は過去の一連の出来事の「記述」を指すことを最初に確認しておきたい。

次に確認しておきたいのは、物語の特徴である。物語の重要な特徴は次の二点に要約できる[*4]。

a) 一定の主題によって統一されており、時間の経過にともなう主題の変化を示す。
b) その主題の変化は「始点―中間―終点」（beginning-middle-end）の構造を持つ。

それぞれ順に見ていこう。第一に、物語は一定の主題によって統一されており、時間の経過にともなう主題の変化を示す。なるべく単純な例をあげると、ドイツの通史にはドイツという主題が存在する。つまり、ドイツに関連する出来事に言及し、関連しない出来事には言及しない。例えば、カールの戴冠や三十年戦争などの出来事に言及し、ドイツという国のなりたちや変化を示す。逆に、エジプトにおけるピラミッドの造営や日本における鎌倉幕府の成立には言及しないはずである。言及しているならば、ドイツという主題によって統一されているとは言えなくなる[*5]。

Roth（2020: 20）が主題を持った物語の事例として取り上げるのは、Michael Friedman（2000）*A Parting of the Ways* である。Friedman はいわゆる「分析哲学と大陸哲学の分断」を取り上げ、その起源として 1929 年のダヴォス討論を引き合いに出す。ダヴォス討論ではハイデガーとカルナップとカッシーラーが顔を合わせて議論を交わしており、互いの問題意識とその対立点を理解することができていた。その背景として新カント派の伝統が重要な役割を果たしたことを Friedman は指摘する。彼らは当時ドイツで支配的だった新カント派の伝統の中で訓練を受け、自らの哲学を展開していた。彼らの哲学が互いに異質なものに見えるのは、政治情勢も手伝って彼らの哲学が異なる方向に先鋭化していき、新カント派の伝統を離れた結果である。このような記述は、カルナップとハイデガーとカッシーラーの哲学的遍歴をただ個別に跡付けているわけではなく、彼らが新カント派という知的土壌を共有していることに注目し、それらを新カント派の分岐という変化の下に統一している。したがって、この研究はそれぞれの哲学者に関するモノグラフの寄せ集めではなく、新カント派という哲学的伝統を主題とした物語になっているのである。

第二に、物語は「始点―中間―終点」の構造を持つ。このことはいくつかの点に分けて説明する必要がある。まず、物語は一定の主題の変化を示す以上、二つ以上の時点に言及するはずである。最も単純な例を考えると、変化は始点と終点の二つの時点からなっており、「始点の時点では主題はある状態だったが、終点の時点では主題は別の状態だった」という形をとる。例えば、Friedman（2000）は新カント派の

[*4] Roth 自身の言葉を借りれば、歴史を物語として規定しているのは、「時間の経過に伴う一定の主題の変化を示すことで統一された、始まり―中間―終わりの構造」（Roth 2020: 69）である。

[*5] 物語に主題が存在するという主張は Roth の独創ではなく、多くの議論が蓄積されてきた論点である。それらに詳しく触れることはできないので、主題による統一の詳細については Kuukkanen（2015）を参照。

分岐という歴史的な変化を提示しているが、この変化は、「1910 年ごろは内部に対立を抱えつつも新カント派はまだ分岐していなかったが、1927 年ごろから 1928 年ごろにかけて新カント派は分岐してしまっていた」という形で表現できる。この変化の始点にあたるのが、西南学派とマールブルク学派の間で論争が起こる 1910 年ごろである。Friedman によれば、二つの学派の対立は、ハイデガーとカルナップに引き継がれていく。他方で、この変化の終点にあたるのは、ハイデガーが『存在と時間』を著した 1927 年からカルナップが『世界の論理的構築』を著した 1928 年にかけてのことである。このような変化の始点と終点は主題を共有していなくてはならない。始点と終点で「何か」が変化したと言うためには、「何か」にあたる主題が二つの時点を通じて存在しなくてはならないからだ。この場合、始点と終点を通じて新カント派という主題が共有されている。

この形を拡張すると、始点と終点の中間に様々なものが挿入される。中間としての資格を持つのは主題の経過中の状態か、主題の変化の原因となる出来事である。例えば、Friedman（2000）は彼らの哲学の遍歴をたどる中で彼らの博士論文や当時の社会情勢に言及している。このようにして、物語は始点から終点までの変化を、主題の変化の経過やその変化の原因となる出来事に言及しながら記述する。これが、始点―中間―終点の構造を備えた時系列である。このような構造は、主題が物語を統一する以上は最低限として要請されるものである。

このような規定に基づき、物語は被覆法則的説明に収まらない特徴を持つと Roth は論じる。その特徴にとって重要なのが、物語が物語文によって出来事を記述しているということである。物語文とは、Danto の定義によれば、「少なくとも二つ以上の別個の時点の出来事を指示し、指示する出来事のうちで最も前の時点のものを記述する」（Danto 1965: 143, 訳: 174）文である[*6]。例えば、「1910 年ごろの時点ではまだ新カント派は分岐していなかった」という文は、1910 年ごろを記述しているが、同時に、分岐が完了した時点を指示している。というのも、新カント派が分岐しなかったのであれば、まだ分岐していなかったとは言えないからだ。この定義では、物語文が記述する出来事は「最も前の時点」のものに限られるが[*7]、Roth の議論を再構成する都合上、Roth 自身が明示的に述べているわけではないが、以下では物語文が記述するのは最も前の出来事に限られないと考え、物語文の定義を次のように改めたい。すなわち、物語文とは、少なくとも二つ以上の別個の時点の出来事を指示し、指示する出来事のうち一つだけを記述する文である[*8]。このとき、物語文は後の時点を先行する時点と関連付けて記述することが可能になる。例えば、「ハイデガーとカルナップが著作を上梓した 1927 年から 28 年をもって新カント派の分岐が完了した」という文は 1927 年から 28 年ごろを記述しているが、同時に、先行する未分岐の時点を指示している。というのも、

[*6] なお、Danto の議論で物語文の特徴づけに含まれているのは外延のみであり、内包は考慮されていない。内包に関連する論点は以下の議論を決定的に左右するものではないので、本稿では考慮しない。

[*7] Danto は別の箇所では最も前の時点以外の出来事を記述していると解釈できる例を物語文として扱っており（Danto 1965: 235, 訳: 283）、「最も前の時点の」という規定を Danto が一貫させているかについては疑問が残る。

[*8] それゆえ、以下で提示する Roth の議論は厳密には著者が解釈したものであるが、物語は通常の因果的説明と区別されるという結論については Roth が明示的に述べている通りである。なお、この解釈は、Roth（2020: 15）が自ら議論の下敷きとして引用している Mink（1987b: 199–201）の議論を踏まえている。

ハイデガーとカルナップが新カント派の伝統を継承していなかったのであれば、彼らの哲学の発展をもって分岐とは表現できないはずだからだ。事実、彼らが新カント派という共通の出自をもっていたことはFriedman（2000）以前には注目されていなかったため、彼らの哲学の発展を分岐と捉える者もいなかった。物語はある時点の出来事を他の時点の出来事と関連付けて記述しており、そのような記述は物語文によって初めて可能になっている。

Roth によれば、このように出来事を主題の変化の一部として記述する物語文は、物語全体に依存している（Roth 2020: 13–15; cf. Mink 1987b: 199–201）。最も単純な場合として、出来事を始点や終点として記述することを考えよう。始点や終点に関する物語文が成立するには、物語が提示する「始点―中間―終点」の構造が成立している必要がある。Friedman（2000）の記述を再び例にとれば、始点の記述、すなわち、1910 年ごろには分岐はまだ完了していなかったという文は、すでに見たように、その後に分岐が完了すること、すなわち終点が存在することを前提している。その一方で、終点の記述、すなわち、1927 年から 28 年の間にハイデガーとカルナップが著作を上梓したことで分岐が完了したという文も、先行する時点では一つの伝統が存在したこと、すなわち、始点の存在を前提している。このように、出来事を主題の変化の一部として記述する物語文は、主題の変化を示す物語全体に依存している。

このような物語の特徴は物語が通常の因果的説明だとすると理解できないと Roth は論じる。というのも、通常の因果的説明においては出来事の記述は個別に独立しており、物語を語る物語文のように相互に依存する全体を形成することはないからだ。例えば、大砲が特定の地点に着弾したことを説明することを想定しよう。大砲の着弾位置は発射位置や発射速度によって説明されるが、発射位置や発射速度に関する文は、着弾位置に関する文とは独立に成立する。因果的説明においては、説明事象の記述と被説明事象の記述は独立している。したがって、新カント派が分岐したという記述のように、物語全体に依存している記述は通常の因果的説明には登場しえない。Roth 自身の言葉を借りれば、通常の因果的説明は「あらゆる物語文を排除してしまう」（Roth 2020: 12; cf. Mink 1987b: 201）。このようなわけで、物語において物語文が物語に依存しているという物語の特徴をうまく理解するには、物語を通常の因果的説明として捉えるわけにはいかないと Roth は論じる。

このような議論に基づいて、物語における物語文の特徴を理解可能にするため、Roth は物語の性質に関する二つのテーゼを導入する。第一のテーゼが非標準化テーゼ（nonstandardization thesis）である。非標準化テーゼによれば、科学理論による説明においては、出来事を同定する標準を理論が説明に先立って与える一方で、歴史叙述においては出来事を同定するための標準が存在しない。例えば、大砲がある特定の地点に着弾したことを力学の理論によって説明することを再び想像しよう。このとき、大砲の発射や着弾という出来事を記述するにあたって何を記述するべきなのかは理論によって定まっている。それは例えば、発射や着弾の位置、砲弾の発射速度、砲の仰角などである。逆に、砲弾の色や着弾地点の土の匂いは無関連である。このような標準は説明に先立って理論によって与えられている。説明を与えるためには、そうした標準によって出来事を同定して記述すればよい。だが、歴史叙述においてはこのような記述の標準が存在しない。したがって、歴史叙述によって物語られる出来事には、語りに先立つ基礎的な記述が存在しない（Roth 2020: 13; cf. Mink 1987b: 201）。

それでは、歴史叙述において、出来事はどのように同定することができるのだろうか。この点について、非標準化テーゼは分離不可能性テーゼ（nondetachability thesis）を支持するとRoth（2020: 14）は論じる。分離不可能性テーゼにしたがうと、物語られた出来事の同定を可能にしているのは物語である。例えば、Friedman（2000）によればダヴォス討論という出来事はハイデガーとカルナップとカッシーラーが一堂に会した出来事であり、哲学的伝統の分岐点である。Roth によれば、このようにダヴォス討論という出来事を同定できるのは Friedman の物語のおかげであり、物語をまたぐ同定の標準が存在するわけではない。例えばハイデガーの思想の展開を跡付ける物語にもダヴォス討論という出来事は登場しうるが、その出来事はその物語によって同定されるため、Friedman が物語るダヴォス討論とは別の出来事である。Roth 自身の言葉を借りれば、「異なる物語は異なる出来事を同定する」（Roth 2020: 67; cf. Mink 1987b: 201）のである。

分離不可能性テーゼによれば、物語られた出来事が物語によってのみ同定されるのは、物語られた出来事が物語によって構成されており、物語が語られる前には存在しないからである。Roth（2020: 14）自身の言葉を借りれば、「歴史的な出来事が『存在する』のは何らかの物語の一部としてのみである」。この引用における「歴史的な出来事」は歴史叙述によって物語られた出来事を指しており、この引用自体は、物語られた「出来事」が物語という「記述」の一部としてのみ存在する、すなわち、物語られた出来事は物語によって構成されると述べている。例えば、Friedman はダヴォス討論という出来事を哲学的伝統の分岐点として物語るが、Roth にしたがえば、分岐点としてのダヴォス討論という出来事は Friedman によって物語の一部として構成されたのであり、彼が物語る以前には存在しない[*9]。このように、物語られた出来事は物語から分離不可能である以上、物語られた出来事は物語によってしか同定できないと Roth は論じる。

これら二つのテーゼによって、物語において物語文が物語全体に依存しているということが理解可能になると Roth は論じる。これらのテーゼにしたがえば、物語において物語文が物語全体に依存しているのは当然のことである。というのも、物語において物語文が記述している出来事は物語によって構成されており、物語が無ければ同定することもできないのだから、物語が無ければそのような出来事を記述する文もまた成立しない。物語られた出来事が物語に依存している以上、その出来事を記述している物語文が物語に依存しているのは自然なことであるというわけだ。

これらのテーゼに基づいて、Roth は物語を通常の因果的説明と区別しようとする。すでに触れたように、因果的説明においては法則や法則に準ずる一般則が必要であるということは、Hempel 以後の科学的説明論争においても広く支持されている[*10]。だが、Roth によれば、これら二つのテーゼは、法則や一般

[*9] なお、物語られた出来事は物語によって構成されているという主張は、物語られた出来事の実在性という論点とも関連している。出来事の実在性に関する Roth の立場は Nelson Goodman の非実在論（irrealism）を取り入れたものであり、伝統的な実在論とも反実在論とも異なる立場であると Roth は述べているが（Roth 2020: 35–64）、出来事の実在性に関する議論の詳細は以下の議論では関わらないので、ここでは踏み込まない。また、この主張は過去それ自体の実在性を否定しているように見えるかもしれないが、少なくとも、物語とは独立に過去が存在しないということを意図した主張ではないことには注意が必要である（Roth 2020: 14）。

[*10] 60 年代の論争において、因果的説明には法則は必要ないのではないかという批判が Hempel に対してなされているが、Hempel は再反論を行っている（Hempel 1965b: 354–364, 訳: 25–38; cf. 伊勢田 2009）。

則に基づく説明として物語を書きなおすことができないということを帰結する。というのも、法則や一般則によって出来事を説明するには、それらに沿うように出来事を再記述する必要があるが、物語られた出来事はそのような再記述を拒むからである。なぜならば、すでに述べたように、物語られた出来事はそれを語る物語のみによって同定され、物語をまたいだ同定の標準は存在しないからだ。物語られた出来事を法則や一般則に基づく説明として再記述しようとすると、物語られた出来事ではなくなってしまう（Roth 2020: 12, 66–68）。したがって、物語は法則や法則に準ずる一般則に基づく説明ではありえないのである。このような議論がうまく行っていれば、Roth は物語と通常の因果的説明の区別に成功していることになる。

2.3 二つのテーゼの問題点

だが、非標準化テーゼと分離不可能性テーゼに対しては三つの問題が指摘できる。第一に、Kuukkanen（2017）が指摘するように、これら二つのテーゼは歴史家がどのように物語を語ることができるのかを不可解にしてしまう。Roth によれば、物語は、「異なる時点の出来事を概念的に関連づける」（Roth 2020: 8）。その際には、関連付ける出来事を同定する記述が必要になる。ところが、非標準化テーゼによればそのような記述は存在せず、さらに分離不可能性テーゼによると、物語られた出来事は物語から分離不可能であり、物語と独立に同定することはできない。ここに不整合が生じる。物語が出来事を関連づけるためには出来事を同定する記述が必要なはずなのに、そのような記述は物語が無ければ存在しえないのである。Friedman（2000）を再び例にとると、この著作が物語るダヴォス討論という出来事がこの著作以前には同定できなかったとすると、この著作はそもそも何を関連づけているのか、分岐点としてのダヴォス討論という出来事はどこからやってきたのかが問題になる。まとめると、Roth の議論は次の二つの主張のジレンマを抱えている。

- 物語られた出来事は物語から分離できない。
- 物語は出来事を結びつける。

このようなわけで、Roth の立場の不整合を解消するには、いずれかを退ける必要がある。Kuukkanen 自身は物語が出来事を関連づけるという前提を放棄することを提案している。この提案によると、物語は新たな出来事を提示するのみであって、既知の出来事を結び付けることはしない。この立場は確かに上の不整合を回避できるが、それでもなお深刻な問題を抱えている。すでに見たように、これら二つのテーゼは物語をまたいだ出来事の同定を認めず、物語られた出来事を再記述する可能性を排除している。このことはさらに以下の二つの問題をもたらす。

第二に、二つのテーゼを認めると、歴史家が既知の出来事に対して新たな意味を与えるということを整合的に理解できなくなってしまう。歴史叙述においては、広く知られている事実が新たな意味を獲得することがしばしばある。Friedman（2000）がダヴォス討論を哲学史上の分岐点として位置づけているのはその好例である。だが、出来事を再記述する可能性を排除してしまうと、この現象をうまく理解できない。というのも、異なる物語が語る出来事は同じ出来事ではありえないので、既知の出来事を別の物語に置きなおすとき、新たに語られた出来事はすでに知られていた出来事とは別の出来事になる。例えば、ハイデ

ガーとカッシーラーが議論を交わしたダヴォス討論という出来事を、新カント派の分岐を象徴する出来事として新たな仕方で提示するとき、二つの出来事は別のものであることになる。つまり、同じ出来事を別の仕方で提示しているのではなく、同じ時点に関する別の出来事を提示していることになるのである。このような理解は、同じ出来事が別の意味を得ているという直観的な理解とは食い違ってしまう。

第三に、二つのテーゼは科学的説明論争の大前提と齟齬をきたすことになる。科学的説明論争において、日常的な出来事を科学理論によって再記述できるということは大前提である。例えば、ある日水道管が唐突に破裂したという出来事を説明するとしよう。この出来事に対しては、気温が氷点下に達したため、水道管内部の水が氷結し、膨張した水が鉄を損傷させたのだという説明が可能である。このように、「水道管」のような科学理論には登場しない対象を含む出来事も、再記述を通じて科学理論に基づいて説明できる。もし、科学理論による記述が日常的な記述と同一の出来事を記述していないのであれば、この例は「水道官の破裂」の説明にはならない。だが、分離不可能性テーゼは、物語られた出来事を再記述する可能性を排除している。したがって、物語られた出来事が他のいかなる出来事とも同一でありえないならば、物語を語ることはいかなる意味で何かの説明でありうるのかという問題が浮上することになる。物語は典型的な科学的説明とは異なると論じているとはいえ、それでも物語は科学的説明の一種であると論じようとしている以上、物語られた出来事の再記述を認めないことは、物語が科学的説明としての資格を持つと論じる上で大きな困難をもたらす。

このようなわけで、非標準化テーゼと分離不可能性テーゼは深刻な問題を抱えている。以下ではこれらのテーゼを修正し、Roth の議論の核になる部分を救うことを試みたい。Roth による重要な指摘の一つは、物語を語る物語文は物語全体に依存しており、このことは物語が通常の因果的説明だと考えるとうまく理解できないということであった。次節では、このような物語の特徴は二つのテーゼを維持せずとも理解できると論じ、二つのテーゼから Roth の重要な指摘を救うことを目指す。

3 Paul Roth の物語論に対する代案

本節では、Roth（2020）が提示した物語の特徴を、彼とは別の観点から捉える立場を提案する。具体的には、物語は過去に生じた出来事の関係的性質を記述するという観点から、物語の特徴を捉え直すことを提案する。そうすることで、物語において物語文が物語全体に依存していることを認める一方で、出来事は物語とは独立に同定できるということを認めることができる。すなわち、物語られた出来事は物語から分離できないという主張にコミットすることなく、Roth の重要な指摘を救うことができる。以下ではこの立場の内実をより詳しく提示した後、この立場が Roth の立場の問題を回避できるのみならず、物語の特徴をより明確にしており、Roth の立場をうまく補っていると論じる。

3.1 関係的性質の媒介としての物語

Roth（2020）が二つのテーゼを導入する根拠になっていたのは、物語を語る物語文は物語全体に依存しているということであったが、以下では、このことは二つのテーゼを導入せずにより整合的に理解でき

ることを示す。そのために踏まえておかなければならないのは、中山（2009: 226–228）が指摘するように、物語文が記述する性質は、過去に生じた出来事が持つ内在的性質ではなく、関係的性質として捉えることができるということである。関係的性質とは、ある対象がそれ自体として持つ内在的性質ではなく、他の対象との関係で持つような性質である。中山の例を借りると、ソクラテスが死ぬと、彼の妻のクサンティッペは未亡人になる。このとき、ソクラテスの死は内在的性質の変化であるのに対し、クサンティッペの未亡人化は関係的な性質の変化であり、内在的な性質の変化ではない。同様に、物語文が複数の時点を指示することで記述しているのは、それらの出来事の関係的な性質である。例えば、ダヴォス討論を大陸哲学と分析哲学の分岐点として記述するとき、分岐点という性質はこの出来事が内在的に持つ性質ではなく、例えば、討論に参加していたハイデガーとカルナップはかつて同じ哲学的伝統に属していたという先行する状態や、それ以後に彼らを継いだ哲学者が二つの分断された伝統を形成しているという後の状況との関係において持つような性質である。

このように物語文が出来事の関係的性質を記述しているのであれば、Roth（2020）が依拠していた物語の特徴をうまく理解できる。Roth によれば、物語において物語文は物語全体に依存している。例えば、「『存在と時間』と『世界の論理的構築』の出版をもってハイデガーとカルナップは新カント派から分岐した」という物語文は新カント派の分岐の終点を記述しているが、このような記述は始点―中間―終点の構造を前提しており、先行する時点の状態に関する文を必要としている。例えば、「ハイデガーとカルナップは新カント派の伝統で教育を受けており、その時点では彼らは新カント派から分岐していなかった」という文がそれにあたる。その一方で、この文も始点―中間―終点の構造を前提しており、終点を記述している文を必要としている。このように、物語において物語文が物語全体に依存しているのは、それらが物語られた出来事の関係的性質を記述しているからであると理解できる。例えば前者の文は、著作の出版という出来事それ自体だけではなく、彼らが新カント派の伝統に属していたという先行する状態との関係によって生じる性質、すなわち分岐の完了という性質を記述している。このような性質を生じる関係とはつまるところ始点―中間―終点の構造であるため、物語文は記述している当の時点の状態だけでなく、物語られた他の時点の状態に依存している。このようなわけで、物語を語る物語文は、出来事が始点―中間―終点の構造との関係において持つ性質を記述するため、その帰結として物語全体に依存している。

このように考えると、物語において物語文が物語全体に依存しているからといって、物語られた出来事が物語と独立に同定できないと考える必要はない。出来事の内在的性質と関係的性質を区別する限り、同一の出来事に対して関係的性質を含む記述と含まない記述の両方が可能であり、関係的性質を含む記述は物語全体に依存するが含まない記述は分離可能だからだ。例えば、ダヴォス討論という一つの出来事について、「ダヴォスは新カント派の分岐点であった」という関係的性質を含む記述と、「ダヴォス討論にはハイデガーとカッシーラーだけでなくカルナップが参加していた」という関係的性質を含まない記述が可能である。後者の記述は関係的性質を含まないので物語から分離可能である。したがって、後者の記述によって、物語によらずに出来事を同定することができる。このような記述に基づけば、同定した出来事を互いに関連づけて記述することで物語を語ることも可能である。

Roth の立場からは、出来事を同定する標準はどこにあるのかということが問題になるだろう。この問題

に対しては、歴史学共同体の中では物語に先立つ基礎的な記述が共有されていると答えることになる。むろん、出来事を同定する基準を具体的に示すことはできないが、その一方で、新たな歴史解釈を提示している研究書が既に知られている事実を年表にまとめているということがしばしば見られる。このことは、特定の研究書が与える物語とは独立に出来事が同定されていることを強く示唆している。むろん、そのような年表もこれまでの歴史叙述を踏まえて出来事を選択しているだろうが、だからといって、特定の物語と独立に出来事が同定できないと考える必要はない。科学理論ほど厳密ではなくとも、物語をまたいで出来事を同定する基準が緩やかに共有されていると考えることは自然だろう。

とはいえ、物語は出来事のいかなる関係を記述しているのかという点について疑念が生じるかもしれない。というのも、その関係が因果関係だけなのであれば、物語は通常の因果的説明と変わらないことになるからだ。分離不可能性テーゼを擁護する動機は、物語を通常の因果的説明と区別することにあった。物語が単に出来事の因果関係を記述していると考えるならば、このような目的は果たされないことになる。ひいては、物語という概念を導入する理由も失われる。

だが、これまでの議論に照らせば、物語が記述するのは出来事の因果関係には限られないと考えることもできる。Roth 自身は指摘していないが、Roth の規定にしたがえば、物語は出来事間の因果関係だけでなく部分全体関係を記述する（cf. Danto 1965: 235, 訳: 283）。より厳密には、主題の変化という全体とその部分にあたる出来事の関係を記述する。例えば、Friedman（2000）は新カント派の分岐という変化を示しており、その過程で 1910 年前後の新カント派内部における論争や 1927 年から 28 年におけるハイデガーとカルナップの著作の出版に言及している。この二つの時点のうち前者が後者の原因なのではなく、両方が新カント派の分岐という変化の部分なのであり、前者が始まりの部分、後者が終わりの部分なのである。このように、物語は物語文によって出来事を主題の変化の部分として再記述し、それを通じて出来事間の部分全体関係をも示す。

このことを踏まえれば、物語が出来事の関係的性質を記述していると考えても、物語は通常の因果的説明とは区別される。なぜなら物語は主題の変化という全体とその部分にあたる出来事の関係を記述するのであり、このような関係は通常の因果的説明には含まれていないからだ。例えば、ダヴォス討論という出来事を何らかの一般則に基づいて説明するだけでは、この出来事が哲学的伝統の分岐点であるということは分からない。この出来事を分岐点として記述するには、新カント派を主題とした物語によってこの出来事を物語る必要がある。このように、物語られた出来事の再記述を認めたとしても、物語が通常の因果的説明と同等であるということにはならない。したがって、これまでの議論は、物語を通常の因果的説明から区別するという点では Roth の議論の動機を救うことができる。

以上の議論をまとめると、物語文は出来事の関係的性質を記述しているのだと考えることで、物語の働きは以下のように理解することができる。物語は出来事を他の出来事と互いに関連づけ、それらの因果関係を記述すること加え、それらを一定の主題の変化の部分として再記述し、全体として一定の主題の変化を示す。このような記述は主題の変化に対する出来事の関係的性質を記述するため、主題の変化を示す物語全体に依存している。だが、個々の出来事それ自体は独立したものであり、単独で同定することもできる。このような立場は、物語られた出来事は物語によらずに同定することはできないという Roth の立

場とは対立するものである。

3.2 Roth の立場との比較

このような立場は、以下のような理由により、Roth の立場の問題点を補ったものになっている。まず、この立場は、2.3 節で指摘した三つの問題を回避できる。第一に、この立場は物語の構成に関する問題を回避できる。Roth の立場によれば、物語は出来事を結び付ける一方で、物語られた出来事は物語によらずに同定できない。そのため、Kuukkanen（2017）が指摘するように、物語が結び付けているはずの出来事は物語を語る前には同定できないことになるため、物語は何を結び付けているのか不可解になるという問題を生じていた。このような問題を本稿が提案する立場は回避することができる。なぜなら、この立場によれば、物語られた出来事は物語によらずに同定可能だからだ。確かに、関係的性質を含む記述は物語全体に依存しているが、同じ出来事を関係的性質を含めずに記述することは可能である。例えば、「ダヴォス討論は新カント派の分岐点だった」という文は物語全体に依存しているが、「ダヴォス討論にはハイデガーとカッシーラーだけでなくカルナップが参加していた」という文はそうではない。物語は出来事を他の出来事と関連づけることで、後者のような記述から前者のような記述へと出来事を再記述すると考えれば、物語全体に依存している記述が生み出されるのは不可解なことではない。このように、物語文は関係的性質を記述しているのだと考えることで、物語全体に依存した記述がどのように生じるのかをうまく理解できるようになる。

第二に、この立場は、歴史家が同じ出来事に対して新たな捉え方を提示するという現象をうまく救うことができる。Roth（2020）によると、物語られた出来事は物語から分離不可能であり、物語以外によって同定することができない。例えば、Friedman（2000）はダヴォス討論という出来事を「分岐点」として記述しているが、「分岐点としてのダヴォス討論」という出来事は、それ以前に語られてきたダヴォス討論とは異なる出来事だということになる。このような立場では、ダヴォス討論という以前から知られてきた出来事に対してFriedman（2000）が新たな捉え方を提示しているという点をうまく理解できない。それに対して、本稿が提案する立場はこの点をうまく理解することができる。ダヴォス討論という出来事はそれ自体としても記述できるし、他の出来事との関係的性質を含めて再記述することもできる。Friedman（2000）はこの出来事を独自の仕方で他の出来事と関連づけて再記述し、「分岐点」という新たな関係的性質を浮かび上がらせているのである。Friedman（2000）の叙述によって、ダヴォス討論という出来事がそれまでとは異なる姿を見せるのはそのためである。出来事それ自体が知られていてもその解釈は変わるということを理解できるのは物語概念の魅力の一つであり、本稿の提案はこの魅力をより生かすものになっている。

第三に、この立場は科学説明論争との接続を容易にしている。分離不可能性テーゼを認めると、物語られた出来事は再記述が不可能であり、他のいかなる出来事とも同一ではありえないので、物語が何かを説明していると考えることが難しくなるという問題がRothの議論にはあった。だが、本稿が提案する立場は物語られた出来事の再記述を認めるため、物語が何らかの事象を再記述して説明すると考える余地が生まれている。したがって、物語が説明としての資格を持つと論じることが比較的容易になっている。

このように分離不可能性テーゼの問題点を回避できるというだけではなく、因果的説明と物語の差異

をこの立場は明確にしている。Roth（2020）は、法則による説明に書きかえられないという点で物語と通常の因果的説明を区別する一方で、物語が明らかにするものは因果関係といかなる点で異なるのかということを明確にしていなかった。それに対して、本稿が提案した立場によれば、物語が明らかにしているのは因果関係に加えて主題の変化に対する出来事の部分全体関係であり、より詳しく述べれば、主題の変化という全体とその部分にあたる出来事の関係である。この性質は原因や結果などの性質とは異なる関係的性質だと考えることができる。このように、本稿の提案は、物語と因果的説明の相違点を明確にしている。

このような利点を持つ一方で、一般的な科学的説明に対する物語の独自性については本稿の立場は Roth の立場より消極的になっている。まず、Roth の立場によれば、物語られた出来事は法則に沿うように再記述することが不可能であり、したがって法則に基づいて説明することは原理的にできない。それに対し、本稿の立場では物語られた出来事は法則に沿うように再記述可能であり、したがって、法則に基づいて説明することも可能である。ただし、物語は主題によって統一されており、主題の変化に対する出来事の部分全体関係を記述するという点で、単なる法則に基づく説明とは異なる。また、科学的説明論争の進展に鑑みれば、部分全体関係を記述するということが物語の独自の特徴と言えるのかについては議論の余地があるだろう。なぜなら、要素の部分全体関係を提示する説明としてメカニズム的説明という類型が提案されているため、メカニズム的説明との相違が依然として問題となるからだ（cf. Glennan 2017: 83–85）。この点について本稿で答えを出すことはできないが、このことが本稿の立場の弱点であるというよりは、むしろ、本稿の議論で物語の特徴が明確になったからこそ、このような課題が見えるようになったというべきであろう。いずれにせよ、このように本稿が提案する立場と Roth（2020）の立場を比較したとき、本稿の提案は Roth の立場の欠点を十分に補っていると言えるだろう。

4 結論

本稿は Roth（2020）の議論の問題点を選り分け、物語の特徴を明確化してきた。その要点を振り返っておくと、まず、物語は始点―中間―終点の構造をもった主題の変化を提示する。それを可能にするのは複数の時点を関連づけながら記述する物語文であり、中でも、出来事を一定の主題の変化の一部として記述する物語文は物語全体に依存している。この点は、歴史叙述の特徴を捉えた重要な指摘であった。次いで、この指摘に基づいて、Roth は非標準化テーゼと分離不可能性テーゼを擁護する。すなわち、物語られた出来事は物語によってのみ同定できると主張する。このような Roth の議論は物語の基本的な特徴については重要な指摘をしているが、非標準化テーゼと分離不可能性テーゼには問題のある帰結がいくつも存在する。そのため、二つのテーゼを退け、代わりに、物語文は出来事の関係的性質を記述していると考えることを提案した。この提案にしたがえば、物語られた出来事は物語から分離できないと考えずとも、それらを記述する文が物語全体に依存している理由を理解することができ、分離不可能性テーゼの問題を回避することができる。また、物語の働きについても、因果的説明が出来事の間の因果関係を明らかにするのに対し、物語はそれに加えて主題の変化に対して出来事が持つ部分全体関係を明らかにするのだという点を明確にすることができる。このようなわけで、本稿の提案は Roth による物語の特徴づけを

補強するものになっている。

最後に物語的説明論における本稿の位置づけと今後の展望について述べておきたい。Roth の指摘によれば、物語が通常の因果的説明と異なっている点は、物語を語る物語文が成立するには物語全体が成立している必要があるという点にあった。そのような指摘に注目し、出来事間の部分全体関係を明らかにするという点にこそ、物語と通常の因果的説明の違いを見出すことができると論じた点に本稿の独自性はある。その一方で、部分全体関係を明らかにすることがいかなる意味で説明に資するのかという問題については論じることができなかった。この点が明らかにならないと、物語が独自の説明形式の一つであると論じることはできない。それゆえ、物語的説明論の発展のためには、主題の変化に対する出来事の関係的性質を明らかにすることによって、歴史叙述がいかなる認識的価値を達成しているのかを問うことが必要になる。そのためには、Roth が十分な注意を払っていない科学的説明論争の進展を踏まえるのはもちろんのこと、近年盛んな科学的理解に関する議論を踏まえることが必要になるだろう[*11]。

謝辞

本稿の草稿に有益なコメントを下さった方々、特に、二名の匿名の査読者、および、伊勢田哲治、井頭昌彦の両氏に感謝します。

参考文献

[1] Beatty, John. 2017. Narrative Possibility and Narrative Explanation. *Studies in History and Philosophy of Science Part A* 62: 31–41.

[2] Currie, Adrian M. 2019. *Scientific Knowledge and the Deep Past: History Matters*. Cambridge University Press.

[3] Danto, Arthur C. 1965. *Analytical Philosophy of History*. Cambridge University Press.（アーサー・C・ダント『物語としての歴史―歴史の分析哲学』、河本英夫訳、国文社、1989 年）

[4] Ereshefsky, Marc and Turner, Derek. 2019. Historicity and Explanation. *Studies in History and Philosophy of Science Part A* 80: 47–55.

[5] Friedman, Michael. 2000. *A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and Heidegger*. Open Court Publishing.

[6] Gallie, Walter. B. 1964. *Philosophy and the Historical Understanding*. Chatto & Windus.

[7] Grimm, Stephen R. 2017. Why Study History? On Its Epistemic Benefits and Its Relation to the Sciences. *Philosophy* 92: 399–420.

[8] Glennan, Stuart. 2017. *New Mechanical Philosophy*. Oxford University Press.

[*11] 例えば、Koster（2009）、Grimm（2017）、Stueber（2019）らは、Danto や Mink を参照しながら、理解という観点から物語の認識的役割について論じている。

[9] Hempel, Carl G. [1942] 1965a. The Function of General Laws in History. In *Aspects of Scientific Explanation and other Essays in Philosophy of Science*, pp. 231–243. Free Press.

[10] Hempel, Carl G. 1965b. Aspects of Scientific Explanation. In *Aspects of Scientific Explanation and other Essays in Philosophy of Science*, pp. 331–496. Free Press.（カール・G・ヘンペル『科学的説明の諸問題』、長坂源一郎訳、岩波書店、1973 年）

[11] Koster, Edwin. 2009. Understanding in Historical Science: Intelligibility and Judgment. In *Scientific Understanding. Philosophical Perspectives.* eds. de Regt, Henk, Leonelli, Sabina and Eigner, Kai, pp. 314–333. University of Pittsburgh Press.

[12] Kuukkanen, Jouni-matti. 2015. *Postnarattivist philosophy of historiography*. Palgrave Macmillan.

[13] Kuukkanen, Jouni-Matti. 2017. The Future of Philosophy of Historiography: Reviving or Reinventing? In *Towards a Revival of Analytical Philosophy of History*. ed. Brzechczyn Krzysztof, pp. 73–94. Brill Rodopi.

[14] Little, Daniel. 2010. *New Contributions to the Philosophy of History*. Springer.

[15] Mink, Louis O. 1987a. *Historical Understanding*. eds. Golob, Eugene O, Fay, Brian, and Vann, Richard T. Cornell University Press.

[16] Mink, Louis O. [1978] 1987b. Narrative Form as a Cognitive Instrument. In *Historical Understanding*, pp. 182–203. Cornell University Press.

[17] Morgan, Mary S. 2017. Narrative Ordering and Explanation. *Studies in History and Philosophy of Science Part A* 62: 86–97.

[18] Roth, Paul A. 2020. *The Philosophical Structure of Historical Explanation*. Northwestern University Press.

[19] Stueber, Karsten R. 2015. The Cognitive Function of Narratives. *Journal of the Philosophy of History* 9: 393–409.

[20] Stueber, Karsten R. 2019. The Ubiquity of Understanding: Dimensions of Understanding in the Social and Natural Sciences. *Philosophy of the Social Sciences* 49(4): 265–281.

[21] Velleman, David. 2003. Narrative Explanation. *The Philosophical Review* 112: 1–25.

[22] White, Morton. 1966. *Foundations of Historical Knowledge*. Harper and Row.

[23] White, Hayden. 1973. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. Johns Hopkins University Press.（ヘイドン・ホワイト『メタヒストリー――一九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』、岩崎稔監訳、作品社、2017 年）

[24] 伊勢田哲治、2009、「歴史科学における因果性と法則性」、「岩波講座哲学 11 歴史／物語の哲学」、岩波書店、95–119 頁。

[25] 鹿島徹、2006、『可能性としての歴史：越境する物語り理論』、岩波書店。

[26] 清水雄也・小林佑太、2021、「因果的説明論の現在――可操性説・メカニズム説・カイロス説」、『フィルカル』、6 号（1）：108–133。

[27] 高田敦史、 2017、「ストーリーはどのような存在者か」、『科学基礎論研究』、44 号（1・2）: 33–53。
[28] 中山康雄、2009、『現代唯名論の構築―歴史の哲学への応用』、春秋社。

著者情報

苗村弘太郎（京都大学非常勤講師）